第13章　オウシマダニ撲滅に寄せて

オウシマダニ撲滅によせて

（社）中央畜産会
南　　哲　郎

沖縄県における牛のダニ熱（バベシア病）対策に、本県の日本復帰前から大なり小なり関係してきた者の一人として、このたびの世界でも２例目となる偉業に対して大きな拍手をお送りするとともに、長年にわたる沖縄県畜産界の強力なチームワークと家畜衛生関係者の並々ならぬご努力に心から敬意を申し上げます。

本病はその病状と被害の大きさから世界的にも牛の重要伝染病として指定され、熱帯・亜熱帯地域の主要畜産国では今なお大きな問題となっております。予防法としては現在でも最も有効な方法は媒介者であるオウシマダニの撲滅でありますが、成功例としては50年以上前の米国における取組みが挙げられます。薬浴、強力な法的規制・啓蒙活動等のもとに、1906年から1943年にかけて約４千万＄の巨費が投じられました。今回のオウシマダニ撲滅は島嶼での成果ではありますが、近年にない快挙であることに変わりはありません。

沖縄県内において最後まで苦労した地域が八重山でありますが、黒島における薬剤耐性ダニの出現で、一時撲滅達成に暗雲がかかりかけました。しかし、タイミング良い新薬の登場とこれに対する県側の素早い反応及び実践が成功への大きな一要因となりました。

一方、技術検討会においては、どういう基準をもって撲滅達成とするかについての議論が毎回なされました。しかし、一定の法則なり基準があるわけではなく、最終的にはおおむね３年以上新たな発生がなく、かつバベシア抗体も陰性の時点をもって撲滅達成とすることとし、その後の汚染地域等からの侵入防止と定期的チェックを怠らないことを条件としました。事実、撲滅に困難を極めた八重山地域からもオウシマダニは平成６年行こう、バベシア原虫は平成５年度以降全く検出されなくなりました。

これに平行して、行政的規制についても平成10年度早々から衛生行政側との協議が重ねられ、結果として平成11年４月12日付けで全面改正された「家畜防疫対策要綱」の中で、八重山地域からの移動制限に関する明記が削除されました。そして、移動制限に関する沖縄県告示も平成11年４月20日をもって廃止され、晴れて八重山牛は自由の身となりました。

今後は限られた面積の島々でいかに持続的な自然循環畜産を構築していくか、またいかにオウシマダニフリーを持続させるかが重要課題となりますが、チェック体制の維持と各島々での適正飼養頭数の把握を進めながらの一層の発展を期待いたします。

オウシマダニ撲滅記念誌寄稿文

農林水産省畜産局衛生課長
松　原　謙　一

沖縄県において、オウシマダニとこれが媒介するピロプラズマ病が撲滅されるという我が国家畜衛生上かつてない快挙がなされたことは誠にご同慶に堪えない次第であり、我が国の家畜衛生行政関係者を代表して心からお祝いを申し上げるとと

もに、関係者のこれまでのご努力に深く敬意を表する次第であります。

沖縄県の八重山地域においては、常在化していたオウシマダニによる吸血・ピロプラズマ病の媒介による直接的な損失のほか、他地域への牛の移動の制限等による経済的な損失は計り知れないものがありました。このため、旧琉球政府が中心となりダニの撲滅に当たってこられましたが、沖縄復帰目前の昭和46年度から国としても沖縄地域の畜産、ひいては日本の畜産の振興を図ることを目的に、国庫補助による「石垣島牧野ダニ駆除事業」に着手し、以降「沖縄牧野ダニ駆除促進事業」、「沖縄牧野ダニ清浄化対策事業」と事業内容の拡充強化を経て、平成７年度の「沖縄牧野ダニ撲滅対策事業」が終了するまで25年間の長期にわたり撲滅対策に取り組んで参りました。

この間、殺ダニ剤による子牛の中毒事故や薬剤抵抗性ダニの出現等があったもののプアオン法等のダニ駆除技術の進展とその有効活用及び沖縄県畜産関係者の多大なる努力の結果、八重山地域では平成７年度を最後にオウシマダニは牧野から見られなくなり、またピロプラズマ病の発生も昭和49年の142頭の発生をピークに、年間70～80頭程度の発生がありましたが、平成５年の１頭の発生を最後に見られなくなっておりました。

このような状況の中で、平成８年度から実施された牧野の清浄維持及び監視体制の確立を図る「沖縄牧野ダニ清浄維持対策事業」における牛体検査、牧野調査により、３年間、オウシマダニが確認できなかったことから、これら地域におけるオウシマダニの撲滅が達成されたものと判断いたしまして、平成11年４月に家畜防疫対策要綱を改正し、八重山地域からの牛の移動制限を解除いたしました。

このオウシマダニの撲滅は、国、沖縄県、関係市町村の行政機関と農業協同組合等の畜産団体及び各農家が一体となって取り組んだことによりなし得た成果であり、この事業で培われた農家との信頼関係は、各種畜産振興施策、衛生対策の推進にあたって貴重な財産となるものと考えております。

私事になりますが、昭和56年から58年にかけて私自身が沖縄ダニ駆除事業の担当係長を務め、宮古地域等への事業実施地域拡大等に関与し、現地における関係者のご苦労を直接見聞きさせていただき、事業の重要さを改めて認識させられたことを想い起こします。

今後、現在の清浄度を維持していくためには、他地域からのオウシマダニの侵入の防止を図ることが不可欠であり、そのための実施体制を整備・運営することが重要となっており、関係各位のなお一層のご尽力をご期待申し上げます。

最後に、本事業達成に中核的な役割を果たされた沖縄県八重山家畜保健衛生所をはじめ石垣市、竹富町、与那国町、ＪＡ八重山、ＪＡ与那国など関係各位のご尽力にあらためて敬意を表しますとともに、沖縄県の畜産が一層発展されますようご祈念申し上げます。

オウシマダニ撲滅に寄せて

（社）牛乳輸送施設リース協会
間　邦彦

（30年前の思い出・炎天下の調査）

私は、総理府沖縄・北方対策庁（当時の長官は山中貞則先生）の委嘱を受け、本土復帰前の昭和45（1970）年８月末、炎天下の沖縄を初めて訪れ、石垣島から竹富島・黒島・新城島（パナリ）迄の全ての放牧・繋牧地（牛の居るところは全部）で牛とダニの現状を調査して報告すると同時に、「沖縄

牧野ダニ駆除促進事業」の予算要求書を提出した。

当時は放牧地といっても原野でダニの巣、牛はヒドイの一言、「骨と皮の牛がダニの鎧を着ている。よく生きているもんだ。」と云った覚えがある。“何とかしなければ”と思った。炎天下の島々を歩き回り、汗を拭き拭きタイガー計算機を回し、昼夜兼行で２週間で調査報告書と予算要求書を仕上げた。

報告書と予算要求書を対策庁に提出したところ、図らずも長官が目を通されて大変関心を持たれたと聞いている。

難しいと思われた予算要求が、思いがけずすんなり通り、余り期待していなかった？琉球政府畜産課の皆さんは驚いていた。畜産課が本土政府の補助金を使うのは初めてのこと、それから事業開始までが一苦労、補助事業に馴れない畜産課の皆さんと一緒に（と云っても東京と那覇）、補助金交付の手続き、駆除薬剤の選択と入札、ヘリコプターのチャーターまで、当時は電話料金が高くて今のように自由に使えなかったので、いちいち郵便で往復し時間がかかって大変であった。

とにかく、昭和46年（確か６月）の夜明け、石垣島伊原間半島の放牧地にヘリコプター２機が舞い上がった。組織的ダニ駆除の始まりであった。私は、その時太平洋の水平線に昇ってきた朝日が茜色から次第に様々な美しい色に変化して輝いた清々しい美しさを今も忘れない。

予算要求当時の私の心情は、“ダニの駆除と言ってもそれは至難のことであるが、ダニを減らすことにより、最低の状態にある牛を〔ダニの鎧〕から解放することが出来れば随分良くなる。これ以上悪くなることは無いのだから”といったところであった。

十年程前石垣島を訪れたとき「パナリにダニはいない」と聞いたが信じられなかった。しかし、調査から30年、琉球政府補助による薬浴開始からおよそ半世紀、遂にオウシマダニを撲滅した。研究と改善を重ね、粘り強くこの偉業を成し遂げた皆さんのご努力には、ただ敬服するのみであります。

本当にご苦労さまでした。

私が直接この事業を担当したのは僅かに１年３ヵ月程でしたが（その後も予算要求には関わった）、その間に多くの沖縄の方達と一緒に仕事をした。特に屋富祖幸栄さん（当時畜産課衛生係）、山城英文・那根元・唐真正次の皆さん（当時八重山畜産指導所）とは終始一緒に働き泡盛を酌み交わした仲。また、故人となられたが内原英郎元石垣市長（当時助役）には、調査の途中若気のいたりで「本気でダニ駆除に取り組む意志があるのか」と迫った記憶があるが、今思うと汗顔の至りである。事業には特に深いご理解とご協力を戴き、感謝しております。ご冥福を祈ります。

今“ダニの鎧”のいない快適な草地にいる牛はピカピカに光って本当に幸せそうです。この状態を維持していくのは、これからが本当に大変なことです。全ての関係者の今まで以上の理解と結束がなければなしえません。

皆様のご努力の成果を心からお慶び申し上げるとともに、沖縄の畜産と銘柄肉牛のさらなる発展の為、一層結束を図り、ご努力されんことをお願いいたします。

〔追記〕

撲滅記念式典の諸行事に出席し、皆さんの強い熱気を感じました。事業の火付け役をやって本当に良かったと感慨深い想いでした。

有り難うございました。

オウシマダニ撲滅に寄せて

思い出

小　山　義　雄

私が琉球における肉用牛の飼養管理技術指導のため、最初に沖縄を訪ねたのが1967年３月から５月であった。当時の琉球政府畜産課の玉城さんと共に、本島は勿論、伊江、久米、宮古の各島の舎飼地帯と、放牧主体の八重山の島々を回った。

八重山での島巡りで、一番印象に残ったことは、島によっても多少の差があったが、ダニが非常に多く棲息していたことで、勿論放牧牛にも沢山寄生していた。私達が牧場内の叢（くさむら）を歩いたり、草地に腰を下したりすると、ダニがどんどん衣服に這い上ってきた程多いところもあった。このため木に登って休憩したこと、今でも忘れられません。

こんなに多く棲息しているダニの防除対策について、同行した皆さんから、いろいろと話しをきいてみると、異口同音にダニ撲滅は県の指導の下、計画的に確実に薬浴を実施しているため、年々効果が上っている。やがては生々とした牧場、島に甦えることだろうと、自信ありげに話しをしてくれました。

そんなことで、今後ダニ対策が効を奏しダニが撲滅されると、ダニが障害になって草地畜産が進まない本土と異なり、沖縄が今後大いに進展するのではないかと、その期待と希望で心が踊ったこと、昨日のことのように思い出されます。

それから30年余り、これが現実のものとなって生れ変り、草地畜産が見事に実を結んで、今では國内有数の肉用牛生産県に躍進しています。

とくに八重山においては、復帰時の7,600頭が、27年後の現在37,000頭、約５倍まで飛躍的に増頭されており、その上、質的にも大幅に改善され、本土牛と些かも遜色がないまでに改良されつつあります。

これは肉用牛生産技術の向上にもよりますが、それと共に牛生産の一大障害でもあった、オウシマダニの撲滅が最大の要因で、撲滅のため、“１頭もれなく”のスローガンを掲げ、生産者への撲滅滲透を図りつつ、指導の徹底を期した県を中心に、市町村、それに生産者の一致協力の賜であり、この成果に対し、深い感銘を覚えるものです。

さて、このオウシマダニ撲滅にまじわる思い出話しを、もう少し続けてみます。

八重山の島々を、琉球政府や市町村、団体の関係の皆さん７～８名と回った時のこと、同行した人達と民宿に泊り、夕食を共にしたが、例のとおり泡盛が出て、宴酣なわになるにつれ、話題の中心がダニ撲滅に移っていきました。

曰く、人の伝染性熱病で、あれ程猖獗を極めたマラリヤ病も、媒介する蚊“はまだらか”は、我々の努力によって、完全に撲滅したではないか、この蚊の撲滅ができて、ダニの撲滅ができないことはない、必ず撲滅してみせる。我々はこの信念を持って、今後もダニ撲滅のため頑張るんだと、各人が交互に立ち上り演説を始めた。演説が一巡すると、ダニ撲滅のため声高に乾杯をする。それからまた更めて一人づつ立ち上って演説をする。これが何回となく繰り返され明け方まで続きました。

同席していた私は、皆さんのこの意気込みと迫力に圧倒され、ついに出番を失い、また体力も限界にきていたので、残念ながら宴の終盤で、中座せざるを得なかったが、今でも当時のこと懐しく思い出されます。

皆さんのこのダニ撲滅の強固な信念は、当時、沖縄全土の関係の皆さんに共通しており、これが偉大な力を発揮して、世界に誇れるオウシマダニ撲滅という偉業を成し遂げたものと確信しております。

この世界に前例のない業績は、永年にわたる関

係の皆さんの努力の成果であり、この快挙に対し、衷心からお祝いを申し上げると共に満腔の敬意を表す次第です。

オウシマダニ撲滅に寄せて

八重山家畜保健衛生所
初代所長　山　城　英　文

八重山における牧野ダニ駆除は、昭和26年に（故）内原等によって暗中模索の中から考案された薬浴槽を、琉球政府予算で各牧野に14基設置したことから始りました。当時としては画期的なダニ駆除法であり、ここに特筆して然るべきであります。

昭和34年私は琉球政府畜産課からダニ駆除専任の家畜防疫員として八重山に駐在し、上記の薬浴槽を活用してダニ駆除に専念することになりました。ｒ-ＢＨＣ水和剤５％を使用しましたが、効能ではダニには200～500倍とありましたが500倍では子牛の中毒が多発しました。野外実験の結果1000倍にしましたが、それでも時々中毒発生があり、更に野外実験を重ねて朝、夕の涼しい時間帯で薬浴する等して、中毒事故は治まるようになりました。

昭和40～49年の間にＦＡＯ推奨による設計図にもとづいて、高等弁務官資金、国、地全協、市町等の補助により各牧野に57基の薬浴場が設置されました。これらの薬浴場を建設するときに、この薬浴場が要らなくなることを願って建設いたしますとあいさつしたものであります。

昭和45年アズントール50％の薬剤が出現し、ＢＨＣ、ネグホンの欠点を補い牛の中毒もなく、飽血ダニの産卵阻止効果もあって正に画期的な殺ダニ剤であり、関係者の希望を叶えさせてくれました。

昭和46年復帰記念事業として、石垣島牧野ダニ駆除事業が始まりました。世界でも例を見ない大規模事業であります。そのとき私は八重山畜産指導所長として現地対策の任に努めました。八重山の牧野ダニ駆除に国が乗り出したことにダニ撲滅への意を強くすることになりました。

さて空中、地上、牛体の三方からダニを攻める作戦は農家及び技術員を網羅して、華々しく展開され大いに効果を上げました。ダニ撲滅事業は長期戦であるので農家の士気を鼓舞するため、総決起大会を開いて次のスローガンを掲げました。

1．われわれは牧野の清浄化をめざしてダニ駆除事業を強力に推進しよう。
1．われわれは１頭の牛ももれなく月２回の薬浴を完全に実施しよう。
1．われわれは八重山からダニがなくなるまでけい牧を止めよう。
1．われわれは一丸となってダニ０作戦を展開しよう。

以上のスローガンから当時の状況をうかがうことが出来ます。

昭和60年画期的なアズントールが効かなくなった、子牛が死んだ等ショッキングな事件がおきたときは、ダニ撲滅の夢はアズントールと共に消えてしまうかと肩を落す思いもありました。

平成元年時宜を得たバイチコールの出現、これがダニ撲滅の鍵を握っていたと思います。願い叶って57基の薬浴槽は要らなくなり、砂や土で埋めて誘導柵だけが使用され、いよいよダニ撲滅への夢は現実のものとなってまいりました。

最後の総決起大会に出席したとき、私はダニを長期にわたって実験しているうちに愛着を覚え「汝が敵を愛せよ」という気分になり、生物は絶滅寸前になると保存会ができて、これを保存すると